ハンチントン『文明の衝突』再読

——岩倉使節団150年と日本文明の行方を考えるよすがに

瀧井一博

これからこのシンポジウムを企画した趣旨を私から説明したい。タイトルには、「ハンチントン『文明の衝突』再読」ということで、「岩倉使節団150年と日本文明の行方を考えるよすがに」というサブタイトルをつけている。サミュエル・ハンチントンという名前を聞いて聞き覚えのある方もかなり少なくなっているのではないかと思う。一時期、ハンチントンの『文明の衝突』という本は、大変持て囃され、かつ物議を醸した。なぜそれをまたわざわざ引っ張り出してくるのだという思いの方も多いだろう。

その前に、まず岩倉使節団150年をいまなぜ取り上げるのかについて述べたい。いわゆる岩倉使節団とは、1871年12月21日に横浜を出発し（当時はまだ太陰暦で、日本は明治4年の11月10日だったが、行っている間に西洋暦に切り替わった）、1873年9月13日に帰国するまで岩倉具視を筆頭とする錚々たる明治政府の要人たちが、1年半以上も欧米を見て回るというグランドツアーとして歴史上有名である。その150年の節目の年に我々はいるわけである。

にもかかわらず、どうも私が見る限り、ほかに岩倉使節団絡みのイベントは行われていないようなのだ。記念ムードは決して高まっていないように思われる。その理由は何であろうか。以下三つほどその理由を述べてみたい。まず一つ目には、すでに研究がやり尽くされたからではないかと考えられる。だが、そうではないということが、先ほどのコーニツキー先生の講演で証明されているので、ある意味やる気の問題ではないかと思われる。

二つ目は、研究の第一人者が今いないのではないかということである。それを考えれば、やはり先日亡くなられた芳賀徹先生の存在は大きかった。芳賀先生がいらっしゃったことで、岩倉使節団の研究は大きなステップを刻むことになったのだと改めて感じる。その芳賀先生をお迎えしていろいろ書籍を出したり、本シンポジウムとは別に岩倉使節団150年のシンポジウムを挙行したのが、この場にもおられる米欧亜回覧の会であった。芳賀先生は、コロナ禍のまさに直前にお亡くなりになった。この場を借りて、本センターの名誉教授でもあった芳賀先生に改めて哀悼の意を表したい。

三つ目に、盛り上げムードの弱まりが考えられる。私は実は明治維新150年の年（2018年）にも、まさにこの日文研でかなり大きな国際シンポジウムを開催した。そのときは

それを盛り上げようという機運があった。当時の安倍晋三総理が山口県のご出身ということもあって、内閣府で記念の行事を実施しようというかなり積極的な動きがあり、私もそれで一度講師として内閣府の勉強会に招かれたことがある。

ただ、明治150年記念については尻すぼみに終わったという印象を抱かざるを得ない。もしかしたら、岩倉使節団の研究というものも同じような轍を踏みつつあるのかもしれない。臆測だが、その中にやはり1990年代からの失われた10年、20年、30年、Lost Decadesと言われる日本の現状が影を落としてはいないだろうか。私より後の世代にとっては、明治の日本人はすごかった、偉かった、日本は高度成長で奇跡の復興をなし遂げたとかいった物語というものが、どこか空々しく響いたりはしていないだろうか。

そのような中で、なお岩倉使節団の150年を考えてみるということの意義はどこにあるのか。また、さらに言えば、21世紀の日本で、岩倉使節団を考えることにはどのような価値があるのかということについて、ぜひお知恵を拝借したいと考えている。

この企画を考えた時に、私の大学院時代の恩師である京都大学名誉教授の野田宣雄先生の言葉が念頭にあった。野田先生は2020年の年の瀬にお亡くなりになり、それを受けて、先生の遺稿集を門弟たちで出版した。野田先生のご専門はドイツ史だが、私が謦咳に接した1990年代からずっとおっしゃられていたことが、今になって非常に切実に訴えかけてきている。

一例をあげよう。野田先生によると、日本人というのは明治以降、民族的、文化的な同質性の高い国民国家の形成にあまりにも見事に成功を収めたために、グローバル化の時代にあっては、内向きの閉鎖的な社会を形成して適応力を失っていくおそれがある、という。そして、宗教の代用物としての国民国家の正当性が低下していけば、それに代わる国民よりも下のエスニーという別の帰属団体の受皿が用意されていないだけに、日本人がアイデンティティーの危機に陥る危険性も高いと書かれていた。

このように論じる際に、野田先生が非常に意識していたのが、ハンチントンだった。ハンチントンの本が出たときに、これを非常に高く評価し、意識され、論壇などでも紹介をされていた。野田先生自身が「ハンチントンの罠」という言葉を使っているが、ハンチントンは次のようなことを述べている。

まず、ハンチントンの文明の分類によると、日本は独自の単一的な文明であるとされる。他の中華文明、ヒンドゥー文明、イスラム文明、西欧文明、スラブ文明、ラテンアメリカ文明、アフリカ文明、それらとともに、日本文明も独立の単一の文明圏だと捉えられている。ただし、それは必ずしもよいことではない。日本は最も重要な孤立国であるというのだ。日本の独特な文化を共有する国はない。そのような日本の孤立の度がさらに高まるのは、日本文化が高度に排他的で、広く支持される可能性のある宗教、キリスト教やイスラム教、あるいはイデオロギー、自由主義や共産主義を伴わないという事実からであり、そのような宗教やイデオロギーを持たないために、他の社会にそれを伝えて、その社会の人々と文化的な関係を築くことができないのである、としている。ハ

ンチントンは日本文明に対して非常にペシミスティックな診断を下していた。

興味深いことに、このセンターを設立した初代所長の梅原猛先生が、1999年にハンチントンを迎えたシンポジウムが東京新聞主催で行われた際に、ハンチントンと対談をされている（『東京新聞』1999年9月19日）。シンポジウム「21世紀「日本文明」の行方」という、このシンポジウムとも重なり合うようなテーマであるが、そこでハンチントンと梅原先生との間には非常に興味深いやり取りがあった。

幾つかの論点をピックアップしてみたい。日本とは孤立した国で、日本文明とは日本国と合致しているとのことである。ほかの文明は、どれも幾つかの国によって構成されているのであるけれども、日本文明は日本という国民国家とイコールであり、ほかに文明を構成する国はないとされている。そういう意味でもひとりぼっちの国だということで、仲間がいない。そのようなことが論じられている。

これに対して、梅原先生は、やはり日本の文化、特に自然観というもの、これは近代文明を克服する新たな価値となり得るのだと応酬をされている。日本とは、言ってみれば西洋のことも、そして東洋のことも知っている。そのような希有な立場にある。これから中国やイスラム、インドが台頭して、欧米文明圏とそういった様々な文明圏との軋轢が増していく中にあって、日本は文明間の仲立ちができるという、そのような主張もされている。そのためには、やはりこのグローバル社会というものは、実は多文明時代に入っていくということで、その中にあって、日本が閉じ籠もるのではなく、何を外に向けて発信できるかということが重要になってくるという、そのようなやり取りが行われた。

なお、ハンチントンによれば、日本が今後21世紀に歩んでいく選択肢としてはおそらく四つあるだろうと述べている。一つ目は、日米関係を強化する道。二つ目は、むしろ日中関係を強化する道。三つ目は、単独で孤立を貫くという道。四つ目は、むしろもっと積極的に地域に打って出て、東アジアのリーダーとなっていく道ということである。ただし、ハンチントンはそのいずれもリスクがあるとしている。

まず日米関係を強化するといっても、日本とアメリカとの間には大きな文化的な違いがあるので、なかなかそれは容易ではないとのことである。二つ目の日中関係の強化は、日本が中国との関係を強化すれば、おそらくアメリカも中国との関係を強化していくことになるため、米中間で日本は埋没していく危険性がある。三つ目は、言うなれば東アジアのスイスになれということである。だが、それはスイスよりもむしろガラパゴスになっていくという危険性もあるとのことである。これに対しては、「ガラパゴスでも、いいじゃないか」という、開き直りの立場もあり得るかもしれない。四つ目は、東アジアのリーダーになるというわけだが、それが大きな惨禍をもたらした経験を日本は持っている。

しかし、いずれにせよ、この中でおそらく日本に課せられた文明的な課題というものがあるとするならば、やはり孤立というか、そのユニークな位置づけというものをでき

るだけ、むしろポジティブに意味づけていくことができないかということであろう。グローバル社会の中で日本は何ができるかということを考えて、そしてそれを発信していくということが、21 世紀の日本の課題ではないかということを個人的には考えている。

さて、以上のことを踏まえて、日文研の課題とは何であろうか。今まで培ってきたものを鑑みて、日文研に何ができるかということで、我々はこれまで国際日本研究のコンソーシアムをつくってきた。これからそれをさらに海外にも展開させていく。それと同時に、国際日本研究というもののイメージや在り方、コンテンツについても発信していきたいと考えている。

そのような中で、それでは国際日本研究というもののコンテンツや方向性とは何であるかということを、これまで日文研の所内でもいろいろと議論してきた。もちろん初めからそれを確定することは本末転倒である。研究を進め、その果てにある種のイメージをつくっていくということが本来の姿であろう。ただ、ぼんやりとしたキーワードというものが浮かび上がってきている。それは「接合域と多面性」である。

我々はこれを基に、日本の文化とは決してハンチントンや野田先生が言われていたように、最初から非常に均質で、一体性の高いものではなかったのではないかと考え直してみたい。もっとダイバーシティーに富んで、様々な異質なものをつなぎ合わせる、そういうダイナミズムがあったのではないか。そのような問題意識で、国際日本研究の新しい課題と方向を考えてみたい。そのためにコンソーシアムにおいて、学際的、国際的な共同研究を探求していきたい。

このように考えれば、日本研究に希望がないわけではないのではないかと思っている。明治維新の 150 年があまり盛り上がらなかったということは先に申し上げた。しかし、コロナ禍の真っ最中の 2020 年の 11 月、私はあるウェビナーに招待された。それは、日本の議会制 130 周年を考える国際シンポジウムであった。主催は、ドイツ日本研究所とタイのチュラロンコン大学で、オンラインの国際シンポジウムが開かれた（その詳細については、以下のサイトを参照。https://www.dijtokyo.org/ja/event/symposium-on-the-occasion-of-the-130th-anniversary-of-the-opening-of-the-japanese-parliamentglobal-views-of-japanese-parliamentarism-in-the-late-19th-and-early-20th-centuries/）。

日本の国内においては、日本の議会制 130 周年を考える、記念するという試みがあったようには、少なくともアカデミズムの中でそのようなものがあったとは、私は全然聞いたことがなかった。しかし、それを考えるシンポジウムを海外の研究者たちが開催してくれたのである。

興味深かったのは、参加者はドイツ、タイ、中国、フィリピン、インド、ポーランド、エチオピア、イギリスなどの海外の研究者で、しかも日本研究をしている人たちばかりではなかったことである。ほとんどの人は日本を専門にしているのではなく、政治思想や議会制度の研究者で、なぜ日本のような国で、借り物であったはずの議会制度というものを取り入れて、それが 130 年も続いてきたのか、それを考えてみたいというシンポ

ジウムだった。

その議論の中で、エチオピアの研究者から、「なぜ日本はもっと自分の経験を世界に向けて伝えないのか」と言われた。このように、日本の歴史的経験やそこで得た知識を欲している国や人々は、実は世界のあちこちにいるのではないかと思い直すきっかけになった。

岩倉使節団がその最たるものだと言えるが、日本の文明とは、これまで懸命に受容する文明、アクセプトする文明と見なされてきた。しかし、これからは需要ある文明になっていかなければならないのではないか。日本へのニーズというものは何なのかということを探し出す、それが21世紀の岩倉使節団の役割なのではないかと思った次第である。

参考文献

泉三郎『堂々たる日本人 知られざる岩倉使節団――この国のかたちと針路を決めた男たち』（祥伝社、1996年）。

野田宣雄『「歴史の黄昏」の彼方へ――危機の文明史観』（千倉書房、2021年）。

芳賀徹『外交官の文章――もう一つの近代日本比較文化史』（筑摩書房、2020年）。

芳賀徹『文明の庫Ⅱ――夷狄の国へ』（中央公論新社、2021年）。

サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』鈴木主税訳（集英社、1998年）。

米欧亜回覧の会、泉三郎編『岩倉使節団の群像――日本近代化のパイオニア』（ミネルヴァ書房、2019年）。